HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芸能「黒森神楽」による震災復興 : 岩手県宮古市・黒森神社におけるエコツーリズムの事例から
Author(s)	海津, ゆりえ
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 43-61
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61174
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_06kaidu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

西山徳明，西川克之，花岡拓郎，平井健文編
『自然災害復興における観光創造』
CATS 叢書第 9 号: 5 章 43-61，北海道大学観光学高等研究センター（2016）

芸能「黒森神楽」による震災復興
岩手県宮古市・黒森神社におけるエコツーリズムの事例から

海津 ゆりえ
文教大学国際学部教授

1. はじめに

これからご紹介するのは，岩手県の宮古市で私たちが東日本大震災直後から現在まで続けてきた，エコツーリズムによる復興支援プロジェクトです。なぜ震災復興でエコツーリズムなのか。発災直後はもちろん，人命救助や住む環境やハード整備が優先されます。それが復興の段階に入っても，多様な専門家がアドバイスをして人が住むところは高台であるべきとか，防潮堤を作るべき，新しいタイプのコミュニティを作ろうといった，文字通りコンクリートの話がどんどん進んでいました。観光は視察型を除けば，都市の再建が終わらないと始まらないと言われていました。はたしてそれで地域はいいのだろうかと考えたところが出発点です。エコツーリズムというのも観光ではありますが，ご存知のように今ある地域の資源を掘り起こし，伝えていくことによって地域をどうにかして活性化しようという側面をもっています。そこに着目すれば，震災復興への支援としてエコツーリズムのアプローチが貢献できるところがあるのではないかと考えたわけです。

こちらのスライド（表 1）は，三陸沿岸における過去の地震・津波の記録です。東日本大震災は盛んに「未曾有の規模」といわれていましたが，830 年からの記録では，ほぼ 100 年に 1 回ぐらいはマグニチュード 7 から 9 ぐらいのレベルの震災を受けています。その都度いろいろなところで津波によって人が亡くなり，人口を減らす結果となっています。

ただ，そのなかでも人々は住み続けてきたわけです。そこには他の地域に移動することができないという事情だけでなく，この地域におそらく災害を乗り越えて生き続けていける知恵とか，そこに住み続ける理由があるからではないかと思います。日本のエコツーリズムというのはそのような地域の宝や力に着目するところから始まります。私たちはまさに自分たちができることをこのコンセプトに見出そうと考えました。震災の後，メディアが「失われてしまったもの」を数え上げることが多い中で，残された宝から復興を始めよう，という提案でもありました。

対象地は岩手県宮古市です。なぜ宮古だったのか。ここに二戸が関わってくるのですが，二戸市の小保内市長（故人）と宮古市の山本市長がとても仲が良かったこときっかけです。二戸市長と私たちは二戸の宝探しを通じて 20 年以上かかわりがあり，エコツーリズムで復興支援をしたいのだがとご相談した時に，それならば誰も目を向けていない文化資源で「黒森神楽」というものを持っている宮古に行きなさいということをおっしゃって

くださったのです。7 月に小保内市長のご紹介で山本市長にお会いし，そこからプロジェクトは正式に動き出しました。

2. 岩手県宮古市の概要と被災状況

2.1 宮古市の概要

宮古のことについて簡単にご紹介したいと思います。宮古市（図 1）は面積 1,260 ㎢と，岩手県で最も面積が広い自治体です。主要な観光地は皆様ご存知のところで言うと，浄土ヶ浜（写真 1），それから宮古港，今年開港 400 年を迎えた歴史ある港です。それからトドヶ崎，本州最東端ということなので，最東端や最北端などがお好きな方はご存知かもしれませんね。重茂半島の外側ですので行くのに時間がかかります。

主要産業としては水産業がもっぱらです。冒頭真板先生から産業を守らないことには地域おこしにはならないんだという話がありました。まさに宮古はその典型と言えるような場所で，東北あるいは三陸の名産というと，だいたい宮古の海域から来ていると思っていただいて間違いないと思います。鮭がなにしろメインで，鮭については後ほどご覧に入れますが，いろんな文化が発達しています。それからわかめや昆布，サンマなど。「目黒のサンマ」という古典落語にちなんで東京の目黒で毎年開催されるサンマ祭りのサンマは宮古と気仙沼から来ています。それからウニです（写真 2，3）。

2.2 被害の状況

宮古市での被災状況ですが，震度そのものは沿岸部で 5 弱，茂市で 5 強でした。神奈川と同じぐらいです。震度による被害より津波の方の被害が大きかったわけです。津波は 14 時 49 分に警報が出て，その後 30 分ぐらいで到達していたということですが，最大波が 15 時 26 分で 8.5m，痕跡からは 7.3m と推定されています。1 番高く津波が遡上したところが田老で 37.9m，重茂半島の姉吉で 40.5m という推定がなされています。亡くなった方が 517 名，未だに行方不明が 94 名，倒壊した家屋が 9,000 棟以上という被害を受けています。

このスライドは東日本大震災の津波被害の写真としてどこかでご覧になったことがあるのではないかと思いますが，これは宮古市の市役所の窓から写した画像です。防波堤を超えて津波が道路に押し寄せたその瞬間を撮った写真になっています（写真 4）。

観光拠点の直後の状況を日本交通公社が調査された結果が報告書で出ています（表 2）。これを見てみるといくつか主だった観光地，とはいっても沿岸域のものばかりですが挙がっています。○×がついていて，左側が直後の状態，右側がすぐに利用できるか。×がついている人工物，キャンプ場等がほとんどです。◎が付いているところ，つまり影響がありませんでしたと言っているところは岩石や洞窟，原野なので，やはり自然物はこういった津波を受けてもその後利用には影響ないが，人工物が多い観光地はすぐに利用でき

る状態ではなかったということです。この写真は（写真 5），調査を始めた当時の田老地区の写真です。こういう風景がずっと広がっていましたが，1 年後にはここはすべて緑に覆われ，今現在は後ほど写真が出てきますが，復興に向けて盛り土がどんどん進んでいるところです。

2.3 宮古市の観光

この図は観光入込客数の推移です（図 2）。右から 2 つ目のグラフが 2011 年のものですが，前年の 27%に減少しています。その前も見ていただくとわかるように，どんどん衰退している中で震災でした。観光に関する打撃は相当大きく，未だに復旧に至ってはいません。

ただ復興事業は進んでいるところは進んでおり，震災遺構の認定第 1 号が宮古の「たろう観光ホテル」（写真 6）でした。田老地区は復興事業の対象地で，防潮堤の内側の住宅地が流れてしまったところは盛り土をしています。海から上がった高台の上には復興公営住宅と移転先の住宅が建てられています。復興公営住宅はこれから仮設住宅から移転する人々を迎えます集合住宅になります。右にある建物が「たろう観光ホテル」です。いろいろな議論がありましたが，田老は最終的には 14.7m という防潮堤を作るという結論が出ました。海に近い人達なので海から随分離れてしまうことについてかなり反対もありましたが，これまでは過去何度か防潮堤が津波を守ってきたということが実績としてあるのでそこが勝ったということです。

3. プロジェクトの概要

3.1 プロジェクトメンバー

宮古市で実際に何をやってきたのかをご紹介いたします。研究メンバーは文教大学・立教大学・京都嵯峨芸術大学の 3 大学，つまり海津・橋本・真板と比田井さん，二戸市から五日市さんにも協力していただきました。また本研究の特徴として，当初から学生たちを参加させております。宮古市でエコツーリズムによる震災復興プロジェクトを行うので，研究チーム名を「宮古エコツーリズムプロジェクト」（略称 MEP）といたしました。

3.2 資源調査（宝探し）とその結果

実施してきたのは次の 3 つのステップです（表 3）。初年度はまず宮古に残っている宝は何なのかをヒアリングによって調べました。宝探しと呼んでいます。次に，2012 年からは宝探しをベースとしたエコツアーを企画し，外から来訪していただくしかけを作りました。2012，2013，2014，2015 と過去 4 回，継続してまいりました（表 4）。現在は第 3 ステップとして継続のしくみづくりを進めているところです。目標は，①宝さがしを

通じて地域の方々が足元の資源に誇りを持っていただく，②ツアーを介して地域外からの目が注ぎ続かれる流れを作る，という２つの作用によって復興を後押しすることです。

初年度は調査として 30 名ほどの方々にヒアリングを行いました。この頃はまだ自治体としても復旧の方に追われており，とくに漁業者は外への対応どころではないので，ご紹介頂ける範囲の中でということになりました。その結果，被災が少なかった組織や機関，市役所の各部局，観光協会や公的機関等が優先されましたが，あとから補足すれば良いわけで，致し方ないところです。

宝さがしを始める際，重点を置く資源をいくつか設定しました。一つは黒森神楽です。少なくとも 400 年以上の歴史があると言われ，東北圏内では非常に有名な神楽です。それから，「生業」です。漁業者に会いたかったのですが，ちょっとそれは遠慮してくださいということでしたので農業の方，それから岩手県立水産科学館で話を伺いました。館長のご兄弟が重茂の漁協長です。そして，震災からの復興など「地域づくり活動」です。田老で立ち上がった地元 NPO や観光協会等にお話を伺いました。

調査には立教大学と文教大学から学生計 9 名とともに入りました（写真 7）。2011 年は宮古のホテルも復旧の段階にありましたので，市内に泊まることができず，盛岡市の社会福祉協議会が開営をしていた，「かわいキャンプ」という廃校を使ったボランティア用のキャンプを利用させていただきました。1 週間自炊をしながら寝泊まりをして，毎朝，二戸市が提供してくださった公用車に揺られてトコトコと調査に出ていくということを繰り返しました。

3.3 代表的な宝

(1) 黒森神楽

把握した宝の例を紹介していきたいと思います。まずは黒森神社（写真 8）の黒森神楽です。国指定の重要無形文化財に指定されており，文書でたどれる限りで 400 年の歴史をもつ神楽です。神社の神楽は通常，氏子さんのいるエリア―霞というのだそうですが，で舞うのが普通なのですが，黒森神楽の場合は，南部藩から霞を越えて藩内を回ってよろしいというお墨付きを頂いていたので，黒森神楽の神楽衆だけは毎年正月から 3 月までのいわゆる農閑期に，沿岸域の自治体をずっと周り歩いたという歴史をもっているところで，今も続いています。岩手県には普代村の鵜鳥神楽（うねどりかぐら）という，追手門大学の橋本裕之先生が研究している神楽ですが，もう 1 つ同じような廻り方をする神楽がありまして，これと連携して毎年南回り，北回りをそれぞれ交互に廻っています。例えば黒森神楽が北回りの年は，黒森神楽は 1 月 3 日の舞初めを皮切りに 3 月ごろまでの間に宮古から北へ北へと沿岸都市を渡りながら久慈まで行きます。鵜鳥神楽はその年は普代村から南へ南へと釜石まで下ります。翌年は，黒森神楽は南回りなので宮古から釜石方面へと下り，鵜鳥神楽は普代村から久慈市まで廻ります。巡行と呼んでいますが，訪れた先には

「神楽宿」と呼ぶ神楽衆を招いた家があり，神楽衆はそこで夜神楽を舞い，一夜を過ごします。陸中地方の廻り神楽，という名称で呼ばれています。

その背景には黒森神楽の神様―権現様と呼んでいますが，がおわす黒森神社がある黒森山の存在があります。黒森山は標高 300m たらずの低山ですが，漁師さんが海に出た時の「山当て」の場所になっていました。山が守ってくれて漁をしているという気持ちがあったので，黒森神社は信仰の対象になったのです。しかも黒森神楽は神社の権現様を連れて沿岸域を訪れてくれる。神社の例大祭には三陸沿岸から漁業関係者が多い時は 2 万人ぐらいお参りに来ていたということです。黒森信仰は宮古市だけでなく，沿岸域の人たちが繋いできたのであって，沿岸域全体の誇りでもあるということがわかりました。黒森神楽には演目が 100 以上あるといわれていますが，中でも「山の神」（写真 9）と「恵比寿舞」（写真 10）の 2 つの舞がとても重要です。恵比寿さまはご存知のように海の神様ですので，恵比寿舞を舞ってもらうことによって，海の安全と豊漁を願う沿岸域の人たちが 1 つになれる，心をつなぐという役割を黒森神楽は果たしていました。沿岸域と黒森山の関係を図示したものが図 3 です。

神楽衆の方々も，巡行する沿岸の町から志願ないしスカウトされた芸達者な方々で，橋本裕之氏は「ドリームチーム」と呼んでいます。非常に見応えがある見事な舞ですので，機会があったらぜひご覧ください。

震災直後はやはり，娯楽の要素があることや，音を出すということへの抵抗があって，神楽衆は演じることを自粛したということでした。流れてしまった神楽宿も少なくなかった。でも，夏に近づく頃になると，徐々に演じてもらいたいという話が出てきたそうです。家に来て舞ってもらいたい，あるいは仮設住宅や避難所で上演してもらいたいという要望が来るようになり，「舞ってもいいんだ」という意識に変わっていき，それからは色んな所から頼まれては出かけて行って神楽を舞うというふうになったと伺いました。海外からの支援へのお礼として日本文化を代表してパリやモスクワ，ニューヨーク等にも遠征しています。以上が黒森神楽についてです。

(2) 食

その 2 として「食」があります。宮古はかなり広い自治体で，沿岸域から早池峰山まで広がっています。沿岸域の海の幸と内陸の山の幸がミックスした，そういった文化であるということがわかりました。沿岸域ではサケ，内陸域ではクルミ，これが共通した重要な食のキーアイテムです。行事食，日常食あるいはお祭りの時の食というようにいろいろと使い分けをされていました。マタギが山で仕留めた動物を調理して出してくれる食事処もあります。

宮古では鮭がとても重要な資源で，北海道が日本一になる前は宮古が日本一の産地でした。宮古の鮭はいろいろな展開をみせており，鮭文化圏といってもいいでしょう。左上は，サーモンくんとみやこちゃんという「ゆるキャラ」（写真 11）です。鮭は南部鼻曲鮭といって繁殖期になると鼻が曲がってきます（写真 2）。これが宮古の鮭のシンボルで

す。もう少しでシーズンになりますが，新巻鮭を作ったり，燻製を工夫したり，めふんといった腎臓の塩辛を作ったりしています。サケ博士の中嶋悟先生という方がいらっしゃるのですが，高校生と組んで鮭を使った商品開発などをこれまで手掛けていらっしゃいました。鮭皮を使ったランプシェードや名刺入れなども作っています。中嶋先生宅は鮭の孵化場のすぐそばにありますが，津波で資料をすべて失われてしまったとのことです（写真12）。

(3) 地震・津波の碑

宝その 3 としては，防災を伝えていく知恵があります。飢饉に関する碑や文書があると真板先生に教えていただきましたけれども，津波に関する碑も色んな所に置かれています。スライドは浄土ヶ浜にある碑ですが（写真 14），地震が起きたらすぐに高いところに逃げろ，家を建てるときには必ず津波が絶対来ないところに建てなさいというようなことが綴られているものです。同じものが何箇所にも置かれています。各所で山の上に逃げる避難路が整備されており，沿岸域から 5 分で山の上に逃げられるように道が作られています。震災後に作られたものもあれば，その前からあるものもあります。それから，先ほど五日市さんからもご紹介があった「学ぶ防災」のように，防災について教える新しい観光の中仕組みもできています。

3.4 宝を活用したエコツアーの企画

(1) 2 種類のエコツアー

これらの「宝」をベースとして 2 本のツアーを作り，2012 年 10 月 13 日・14 日に実施しました。1 つは黒森神社と黒森神楽をテーマにしたもので，神社をずっと守ってきている麓の山口集落を出発し，旧参道を通って神社に上り，参拝をしたのち戻ってきて公民館で郷土料理を食べ，神楽を鑑賞するというツアーです。神楽上演前には神楽研究者の神田より子さんにお話をいただきました。ウォーキングと文化体験を組み合わせた 1 日がかりのプログラムです。

もう 1 つは，まさに被災した田老海岸のツアーです。津波で崩れたしまったところを歩きながら崖の上まで登り，奇岩の山王岩を眺めながら崖沿いを歩き，降りてきて復旧したばかりの魚市場で漁協の青年部の方々からわかめのお味噌汁を振る舞っていただく。午後は「学ぶ防災」のツアーに参加する，という盛沢山な内容でした。

いずれも私たちのプロジェクトに賛同くださった日本エコウォーク環境貢献推進機構の協力により，同機構の商標「エコウォーク」の一環として実施しました。JR 東日本ウォータービジネス社が集めた寄付金で協賛してくださったので，それぞれ市外から 20 名を超える参加を得て大がかりなものとなりました。（写真 15, 16）

(2) 変わりゆく「震災復興支援」

① 資金援助にみる変化

2011 年，2012 年は震災復興ブームというかフィーバーといってもいいかもしれません，そういう風潮のただなかにあったといってよいと思います。先述した JR 東日本ウォータービジネス以外にも私たちは 200 万円以上の寄付をいろいろな形でいただきました。そのおかげで 8 月には二戸市の方々に来ていただいてのプレツアーを行い，本番に向けて告知媒体や配布用の地図も作ることができたのです。スタッフを合わせると 1 ツアー40 名以上の参加でしたので，お弁当やおやつの売り上げなどで，ささやかな経済効果にもなりました。

翌年の 2013 年は震災復興に関する助成金や寄付などはなくなりました。以後，今年までは科研費を使っての実施となりました。予算に限界があること，環境省が三陸復興国立公園を指定して沿岸域に「みちのく潮風トレイル」を敷き，私たちが実施したようなエコツアーを開発することになったことから，私たちは黒森神社ウォークだけを継続して実施することに致しました。こちらのコースに，より地域の人達の生活感，宝，誇りというものに然りということを感じたことも，黒森神社ウォークを選択した理由の一つです。

少ない予算なので，毎回同行する数名の学生の旅費と，配布物や広報媒体製作費などを賄えて，かつ地元で運営できるスケールを模索しました。現地との相談を重ね，神社での神楽奉納が行われる黒森神社例大祭に合わせて実施することにしました。時期は 7 月第 3 日曜日です。

② 地元の参加の変化

2013 年は参加費を 3,000 円とし，神社麓の山口集落を出発して旧参道を使って神社に至り，神事と神楽を鑑賞し，社叢林にある杉の古木を見学し，直会に参加してお弁当をいただいて降りてくるというコースです。黒森神社で神楽を見たかったという方が多かったので高い満足度をいただくことができました。

今年は例大祭と組み合わせて 3 回目になりますが，毎年プログラムは変わらないのですが，私たちのかかわり方を少しずつ変化させてきました。2013 年までは震災復興支援として来てくれていた市外の参加者は 2014 年にはいなくなりました。昨年までは，告知媒体づくりや広報，当日の現場役割分担など多くの部分を支援者側の私たちがかなり手掛けたのですが，今年は基本的に地元の方に全部お願いしました。その効果か，昨年は 5 名だった市内参加者が今年は 14 名に増えたのです。

ツアーを始めてから 4 年間になります。まとめますと，2012 年はスポンサー付きでかなり盛大な広報とツアーを実施し，40 名以上の参加者がありました。2013 年は研究費で実施し，3,000 円と割高ではありましたが神楽が終わったあとに神社の方々との直会をやりました。2014 年度は直会に参加するのをやめて金額をガクンと下げて 800 円で実施しました。市民参加は期待したほどではありませんでした。2015 年は企画からすべて市と観光協会に委ねたところ，市民の参加がぐんと増えました。こうやって少しずつ形を変えながら実施をしてきたのです。

③ 人的ネットワークの広がり

人的ネットワークの広がりから，このプロジェクトを考察してみたいと思います。MEP は市長の計らいで宮古市商業観光課とカウンターパートシップを結んでプロジェクトを進めてきました。2011 年の調査から商業観光課を通して観光協会や神社総代会など様々な機関と連携して調査を実施してきました。2012 年にツアーを実施する段階では，黒森神社総代会，黒森神楽保存会，宮古市教育委員会，環境省陸中海岸国立公園のパークボランティアさん，田老漁協青年部など広がりが出てまいりました。2013 年からは田老漁協とはかかわりがなくなりましたが，観光協会や宮古市，黒森神社総代会，黒森神楽保存会等とは結びつきを強めながら継続し，つながりが強くなってきています。またスポンサーとして日本観光研究学会，NPO 法人日本エコツーリズム協会，JR 東日本ウォータービジネス，二戸市等いくつもの機関から支援を取得してまいりました。

4. プロジェクトの総括

4.1 「芸能」の力

参加者のアンケートからわかったことは，黒森神社，黒森神楽そのものの魅力は最も身近な市民を魅了していることです。このツアーは神楽を体験する良い機会となっているということがアンケート等からわかりました。このことは宮古市の観光にとっても目から鱗だったようで，観光協会や宮古市商業観光課から，今まで神楽は宗教と割り切って目を向けてこなかったけれど文化資源として捉え直してみると，大変な宝を持っていることに気付いたとコメントをいただきました。その証拠にというわけではないのですが，それまで「観光協会」という一般的な名前だった観光協会が，2014 年 4 月から「宮古観光文化交流協会」に名前を変え，文化という名前を使用するようになりました。なぜなのかと聞くと，文化資源がこれから宮古の観光の重要な対象になると思いました，とのことでした。

このプロジェクトから「芸能」に着目することの意義が明示されたと思います。なぜ芸能に着目するとよいのかということですが，芸能が持っている力にあります。神楽はただ見る舞ということだけではなく，このエリアでは鎮魂・感謝・娯楽と色んな意味を持っています。その多面性を通して人々を癒す力を持っているということが 1 つです。それから，被災地では多くのものを失いましたが，その方々にとって「神楽がある日常」というものが日常に戻るきっかけにもなっているということです。家族とか平和の象徴であるということです。年に 1 度，神楽があるときには人々が集まるということなので，その機会はとても重要です。神楽を通して住民同士が出会って，さらにそこに外から来た人たちも交流をするということによって，ああ今年も元気に神楽を迎えられたねと言い合う。相互にとって幸せな体験になるということがわかりました。

4.2 方法論としてのエコツーリズムの可能性

それからエコツーリズムという私達が用いた手法の役割と意義ということについてです。自然や文化，歴史など足元にあってこれまで見過ごしてきたものから交流や観光が始まるということを提示できたといえます。また，暦に整理することで，住民どうしで宝が認識されたということもありました。

4.3 学生参加の意義

このプロジェクトは一貫して学生を連れて行きましたが，この効果は大きかったといえます。毎回，例大祭と，その 2 週間前の準備・草刈りに連れて行っていました。学生たちは多くの住民にとって孫の世代に当たります。よそからやってきた孫たちと交流することは，住民にとって故郷を知ってもらう，知恵を伝える機会になっているようでした。また若者の発言は孫や子どもの言葉と重なるようで，短い時間ですが，この交流は双方にとって喜びのある時間であるとわかりました（写真 17）。

4.4 復興支援の風化

最後に，4 年間経過をしてみると，復興支援には賞味期限があるということが示唆されました。復興があって支援があるという限り，そこには支援される側と支援する側という関係ができてしまうので，いつまでもそのままでいてはいけないとわかってきました。この枠組みからそろそろ脱する必要があると感じています。

5. 今後の課題

5 年の間に現地との関係はとても良いものになってきました。今後もプロジェクトは続けるつもりです。

そのうえで，このプログラムではガイドの存在が非常に重要です。これまでは環境省の国立公園パークボランティアの有志の方々がガイドを買って出てくださいましたが，今後は住民から育てていくことが必要だろうと思っています。宮古市は震災前から市民の“おもてなし力”を鍛えようと「もてなし検定」事業を観光協会に委託して実施しています。そこからガイドの担い手を育てようという構想があるので，このしくみとタイアップしていくことが 1 つの方法だと考えています。すでに 2 回ほど勉強会はしたのですが，まだ現場に立っていただく段階までは来ていません。当面の目標はその点です。

また，いま二つの側面で被災地は難しい段階に差し掛かっていると感じています。一つは復興支援事業の限界です。公営住宅や戸建て住宅が建てられていく一方で，仮設住宅から出られない人々も多く，復興関係のケアが打ち切られていく中で心の支援が必要になっているのです。黒森神楽が人々に与える安寧や癒しはこういう方々にこそ必要と思われます。観光もエコツーリズムも超えて，地域の文化体験や交流機会を創出していくことが必

要なのだと考えています。もう一つは，震災から数年の間は復興というタスクフォースがあったために忘れていた地域本来の潜在的な課題への対応です。過疎化，高齢化の中にあった東北の各都市は一様にその問題に直面しています。

予算確保の問題も私たち個人にとっては大きいのですが，こういう話をしていると現地の方からうちに泊まれと言ってくださるようになったりしています。泊めてもらえるのは学生だけかもしれませんが。震災後 5 年を迎え，ここからまた新しい展開がありそうだと感じています。

すみません，だいぶ時間が超過してしまいました。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

文　献

岩手県
2011 『岩手県東日本大震災津波復興計画　復興基本計画』。
日本観光研究学会・宮古エコツーリズム調査チーム
2012 『エコツーリズムによる震災復興支援の実証的研究―岩手県宮古市における研究―1000 年の絆を紡ぐ宝さがし調査報告書』。
橋本裕之
2015 『震災と芸能』大阪：追手門学園出版会。
宮古民友社
2011 『東日本大震災 3.11 宮古地方版　重茂を襲う碧い牙』。
渡辺偉夫
1998 『日本被害津波総覧第 2 版』東京：東京大学出版会。

写真１　浄土ヶ浜（宮古観光文化交流協会提供）

写真２　南部鼻曲鮭（撮影：筆者）

写真３　目黒さんま祭り
（撮影：滝口貴美子）

写真４　津波が堤防を乗り越える。宮古市役所から撮影（出典：宮古市）

写真５　スーパー堤防が破壊された田老地区　2011 年７月
（撮影：筆者）

写真６　震災遺構第１号「たろう観光ホテル」（撮影：筆者）

写真７　調査風景（撮影：筆者）

写真 8　黒森神社（撮影：筆者）

写真 9　「山の神舞」
（提供：宮古市教育委員会）

写真 10　「恵比寿舞」
（提供：宮古市教育委員会）

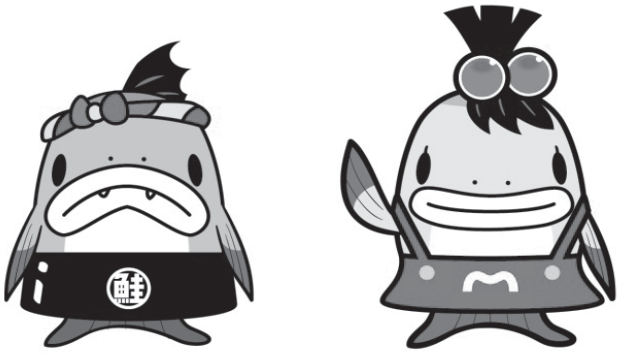

写真 11　サーモン君とみやこちゃん
（出典：http://www.city.miyako.iwate.jp/suisan/samon_miyako.html）

写真 12　宮古の鮭文化の継承を願う中嶋悟氏（撮影：筆者）

写真 13　鮭皮を使ったランプシェード
（撮影：筆者）

写真 14　大津波顕彰碑（撮影：筆者）

写真 15　黒森神社エコウォーク（撮影：筆者）

写真 16　田老海岸エコウォーク（撮影：筆者）

写真 17　草刈りでの談笑（撮影：筆者）

表１　東北の震災史

年代		名称	震源	震度	被災規模等
830	天長７	出羽天長大地震	出羽国	7－7.5	秋田城壊，百姓15人死亡，100人負傷。
850	嘉祥３	出羽嘉祥地震・津波	庄内地方	7	圧死者多数。国府倒壊。「海水が国府から6里まで押し寄せた」
869	貞観11	多賀城地震	三陸沖	8.3	多賀城倒壊。死者1,000名以上。仙台平野，名取平野全域が浸水。東日本大震災に匹敵する規模と推定される。
1611	慶長16.8.21		会津		津軽城の石垣が崩れる。死者3,700人，倒壊家屋2万戸以上。
	慶長16.10.28	慶長三陸地震津波	三陸沖	8.1	南部藩領で約3,000名，伊達藩領内で1,783人の死者。
1677	延宝5.3.12	延宝八戸地震津波	八戸	7.25－7.5	家屋流潰約60。
1694	元禄７	能代地震	出羽地方	7	
1772	明和９		陸前・陸中	6.75	地割れ・山崩れ・落石による人身被害。
1793	寛政５		陸前・陸中・磐城	8.3-8.4	大槌・両石・気仙沼・釜石に津波による被害。流出家屋多数
1856	安政５	安政の八戸沖地震	日高・胆振・津軽・南部	7.5	津波が三陸・北海道の南岸を襲う。家屋流出・倒壊・溺死者。
1896	明治29	明治三陸地震津波	岩手県沖	8.25	津波が北海道から牡鹿半島沿岸に襲来。岩手県死者18,158名。
		陸羽地震	秋田県東部	7.2	岩手・秋田県境で被害大。死者209名。
1933	昭和８	昭和三陸地震津波	三陸沖	8.1	太平洋岸に津波。三陸沿岸の被害甚大。死者・行方不明者3,064名。
1952	昭和27	十勝沖地震	釧路沖	8.2	津波波高北海道3m，三陸沿岸で1～2m。死者28名。
1960	昭和35	チリ地震津波	チリ沖	8.5-9.5	波高は三陸沿岸で5～6m，被害大。死者・行方不明者142名。
1968	昭和43	1968年十勝沖地震	三陸沖	7.9	三陸沿岸３～５ｍの津波。死者52名。
1978	昭和53	1978年宮城県沖地震	宮城県沖	7.4	宮城県を中心に死者28名。
2011	平成23	東北地方太平洋沖地震	三陸沖	9	犠牲者・行方不明者約22,700名。

（宮古市教育委員会（1991），高山（2011），大矢（2011）などをもとに作成）

表２　観光拠点の直後の状況（出典：日本交通公社 2011）

区分	資源名称			状況評価		備考（アルファベットは日本交通公社による観光資源評価）
				資源	利用（2012年3月）	
海岸	大須賀海水浴場			○*	×*	
	浄土ヶ浜一帯	一帯の景観		◎*	○*	A
		浄土ヶ浜	活動対象	○	×	2012年6月再建・再開（レストハウス）、2012年マリンハウス前トイレ復旧、2015年5月レストハウス前トイレ復旧、2015年度砥石浜休憩棟・トイレ復旧
			鑑賞対象（近景）	○	○	
		蛸の浜		○	×*	
	女遊戸海水浴場			△	×	B
	真崎海岸			－	×	
キャンプ場	姉吉キャンプ場			×	×	2016年復旧予定
	中の浜キャンプ場			×	×	
	沼の浜キャンプ場			×	×	
島	日出島			◎*	×*	
原野	十二神自然観察教育林			◎*	◎*	
岩石・洞窟	トドヶ崎			◎*	×*	B
	姉ヶ崎			◎	◎	
	ローソク岩			◎*	×*	
	潮吹穴			－	×	
	三王岩			◎	◎	
博物館	県立水産科学館			◎	◎	
施設	シートピアなあど			×	×	2012年7月プレハブにて営業再開、2013年7月復旧

*ヒアリングによる調査

凡例：「観光資源そのものの状況」の評価基準

記号	観光資源の状況	利用の状況
◎	影響は見られない	影響は見られない
○	資源の一部について軽微な影響が見られる	一定の制約の上であれば観光利用が可能
△	資源の一部について重大な影響が見られる	
×	資源は元の姿を全く留めていない	現状では観光利用は不可能
－	目視による確認ができなかった	目視による確認ができなかった

表３　宮古エコツーリズムプロジェクトの実施過程

期	年度	活動	成果品
調査期	2011	①ヒアリング調査（学生9名） ②フェノロジー作成 ③ツアー企画	報告書
エコツアー造成期	2012	①旧参道整備（学生6名） ②プレツアー実施（二戸市協力） ③エコツアー実施（2か所）（10月） ④ガイド研修会@二戸市	黒森・田老コースマップ みやこ宝こよみ
	2013	①刈り払い・境内清掃（学生4名） ②エコウォーク（例大祭 7月）	黒森コースマップ
継続期	2014	①刈り払い・境内清掃　（学生６名） ②ガイド勉強会 ③ウォーキング（例大祭 7月）	黒森パンフレット ガイドマニュアル
	2015	①刈り払い・境内清掃　学生4名 ②ウォーキング（例大祭 7月）	

表４　実施したエコツアーの実績（2012～2015 年）

年度	タイトル	広報	料金	参加者数（うち市外）
2012	三陸の宝・宮古の1000年の誇りを知るエコウォーク	ホームページ（日本エコウォーク環境貢献推進機構，日本エコツーリズム協会，日本観光研究学会）	3,500円（寄付込）	24（24）
	海と山と人々と神をつなぐ～黒森神楽と黒森神社，山口集落を歩く～	チラシ，ポスター		
2013	1000年の歴史を紡いだ宮古の宝と出会うエコツアー	ホームページ（日本エコウォーク環境貢献推進機構，日本エコツーリズム協会，観光協会）	3,000円（寄付込）	9（3）
	海と山と人々と神をつなぐ黒森神楽～黒森神社古参道を歩き神楽を鑑賞するエコウォーク	チラシ，ポスター，市広報		
2014	あるってGO！三陸の宝・宮古の1000年の誇りを知るウォーク	ホームページ（日本エコツーリズム協会，観光協会）	800円	5（1）
	黒森の歴史と文化にふれるガイドウォークと神楽	チラシ，市広報		
2015	黒森さんまで，いっしょに歩きませんか？	ホームページ（宮古観光文化交流協会，日本エコツーリズム協会），市広報	500円	16（7）

図１　宮古市と主要な観光地（Google Map を元に筆者が加筆作成）

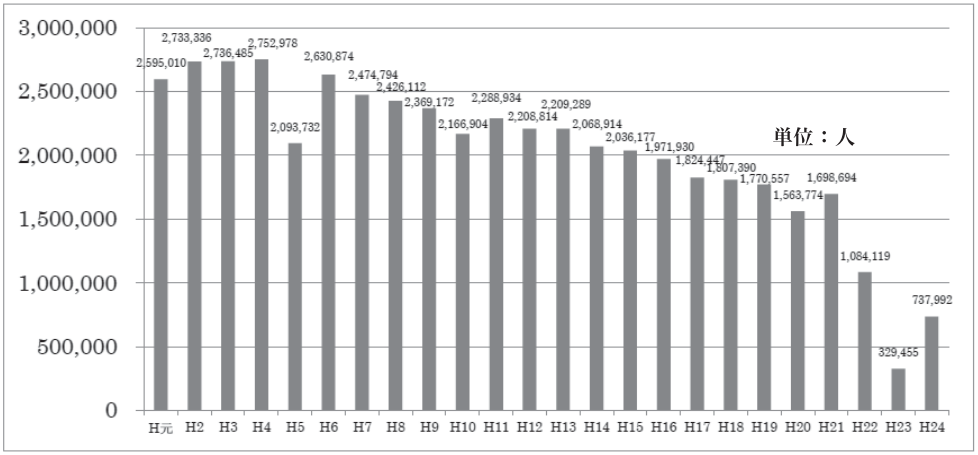

図２　宮古市の観光入込客数推移（出典：宮古市資料）

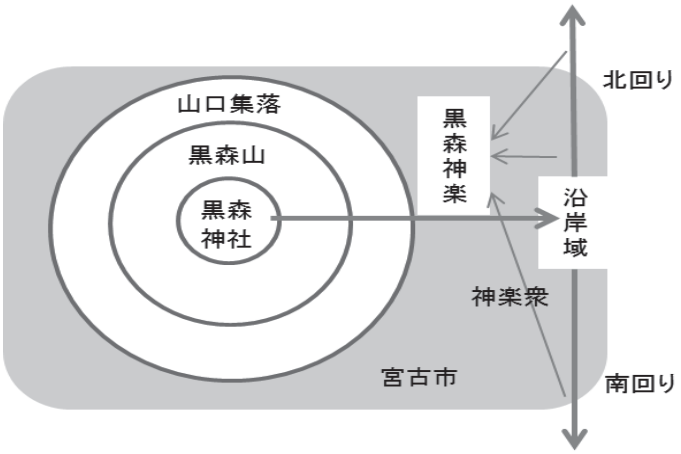

図３　黒森神社と三陸沿岸の関係（筆者作成）